

アメリカにおけるプロレタリア文学概念の定着過程

村 山 淳 彦

はじめに

一九三〇年代、革命文学運動が国際的な規模でくりひろげられていたころ、アメリカ合衆国はその重要な拠点のひとつであった。プロレタリア文学という言葉は、この文学運動のひろがりとともに世にひろく知られるようになったが、アメリカにおいてもいまから約五十年前には、プロレタリア文学という言葉が、文学雑誌だけでなく、一般の新聞やマスコミにも頻繁に登場していたし、人びとの話題にもなっていた。それは、今日の文学を語る言葉としてはほとんど死語になったとしても、文学史上大戦間の革命文学を指示する呼称として、独特なニュアンスをとめないながらもいまでもよく用いられる。

しかし、プロレタリア文学という語は、その誕生当時からそうであったが、いまではますます多義的になって、その正確な意味が見定めがたくなっている。当面する文学上の諸問題を論じるための用語としては有効性をうしなない、歴史という縦糸と政治という横糸がもつれてできた糸玉のようなものになっている。大戦間の革命文学を漠然と想起させる符牒のたぐいになりはてたといってもよいだろう。このような事情は、かつてプロレタリア文学がさかんであった各国に共通して見られる¹⁾。

だが、大戦間の革命文学運動は、世界史上はじめて国際的規模で自覚的に構築された文学運動として貴重な歴史的教育を豊かにふくんでおり、もっと研究されてもよいだろうし、その一環としてプロレタリア文学という語

についても、もっと正確な理解がもとめられる。本稿はこの語の意味をはっきりさせるために、アメリカにおいてプロレタリア文学という概念がどのように形成され、どのように受けとめられ、どのように定着してきたか、その過程をたどろうとするものである。

アメリカの例は、当時の文学運動が緊密な国際連帯のもとに進められたので、他国にも共通する諸特徴をふくんでいると考えられるだけでなく、プロレタリア文学がもっとも自由に展開する余地を与えられた国の例としても、特別な注目にあたいたいと思われる。革命文学運動が活発だった諸国のなかでもドイツやフランスでは、プロレタリア文学という理念がアメリカほどの反響をよんだようには見えないし、プロレタリア文学がアメリカにおとらず熱心に論じられた日本、中国、朝鮮などでは、アメリカとは比較にならないほど苛酷な弾圧のために、議論が十分に深まらないうちに挫折を余儀なくされたからである。

アメリカにおけるプロレタリア文学という言葉の早い

一

ころの用例を集める作業は、本稿の課題にとって重要であるが、資料の制約のために容易ではない。そもそもプロレタリア文学という言葉が、最初いつごろだれによって使われ、どのような経過で普及するようになったのか、くわしいことは不明のままである。しかし、ジョーゼフ・フリーマンは、アメリカのプロレタリア文学のひとつの集大成といえる『合衆国プロレタリア文学作品集』のために書いた「序論」で、アメリカにおけるプロレタリア文学概念発達史の略述を試みており、参考になる。フリーマンの叙述は、今日における研究の空白をすこしでも埋めてくれるものとして貴重であるし、この本が稀覯本に類するものでもあるので、引用が少々長くなるのもいとわず、ここに紹介してみる。

フリーマンがアメリカのプロレタリア文学の源流として最初に掲げているのは、一九〇一年アメリカ社会党結成にともなうて再刊された雑誌『コムラッド』である。

この雑誌——『マッセズ』の先行者——は、その刊行目的を下記のよう述べてた。

「本誌の使命は、(中略)健全な社会主義思想を反映す

るような文学作品や芸術作品を讀者に提供することにある。『コムラッド』は、美術や文学に表現された形で社会主義思想を映し出すように努める。(中略) 社会主義者が文学や美術のあらゆる分野ですぐれた仕事をしてきたにもかかわらず、世界の無産者大衆は(中略) 社会主義の大義のために活動している男女によって創造された、絵画や歌曲や物語の偉大な傑作をほとんど知らないのである。」

『コムラッド』は、早くも一九〇一年に、労働者階級の詩人たちを呼ぶのに「プロレタリア詩人」という言葉を用いていた。⁽²⁾

プロレタリア詩人という言葉は、たしかに当時耳慣れない新しいものであっただろうが、プロレタリア文学概念そのものにはまだはるかにおよびなかった。プロレタリア詩人という表現は、詩人や作家の生活者としての所属階級をしめしているだけで、文学の質そのものの規定とはなっていないからである。それに対してプロレタリア文学の概念は、単に現存する特定の文学の特徴を記述するためのものでなく、めざされるべき目標となる文学

の質をあらわす概念、つまり革命文学としての理念をふくむ規定でもある。青野季吉が「自然生長と目的意識」で論じたところにしたがえば、「目的意識」ができたときにはじめてプロレタリア文学の概念が確立したといえるのである。⁽³⁾

フリーマンは、このような意味でのプロレタリア文学の概念をアメリカで最初に打ち出した人物として、フロイド・デルの名をあげる。

『マッセズ』誌上でフロイド・デルは、社会主義者としての明確な立場からしばしば芸術を論じた。一九一九年の夏には、はっきりプロレタリア文学ということをも口にしていた。その年彼は、ロシアにおけるプロレタリア芸術振興のために教育人民委員部が立てた計画の概要についてのソヴィエトの文書を、それへの熱烈な賛辞を付して翻訳刊行した。真の社会主義者ならばだれもがそうするであろうが、デルは芸術鑑賞を民主化するための諸企画や、真の社会主義的プロレタリア芸術の基礎を築くための諸方針に賛成した。さらに社会主義者としての信条に導かれ、プロレタリア芸術に

活力を与える積極的な特質とは何かということについて、独自の認識に達した。デルは、「真の社会主義的プロレタリア芸術」とは労働者の想像力をかきたてるだけでなく、労働者の知識や勇気を高め、新社会建設のためのたたかいにむかう闘志をふるいたたせるものであるとみなす正しい考え方をもった。⁽⁴⁾

しかし、プロレタリア文学という語の歴史については、フリーマンが描き出した右のような見方に対しては、『合衆国のラディカルな小説』の著者として知られる研究者ライドアウトからつぎのような批判が出されている。

「フリーマンは、」労働者階級出身の詩人を意味する「プロレタリア詩人」という言葉が一九〇一年に『コムラッド』誌上に登場したと述べている。しかし、この文学雑誌をはじめからおわりまで調べてみればあきらかになるように、プロレタリアという語は限定された意味で使われていたし、この雑誌の執筆者たちがラディカルな作品のことをいいたいときには、ほとんどかならず「社会主義的」という語を用いていた。「プ

ロレタリア」という語に「ラディカル」という意味がふくまれるようになるまでには、どうやらだいぶ時間がかかったようである。その証拠には、一九一九年七月、フロイド・デルが『リベレーター』に掲載した書評で（中略）プロレタリアという言葉を用いたとき、まだこの言葉だけでは不十分と感じて、「（中略）プロレタリア反逆小説（中略）」という言い方をしている。⁽⁵⁾

ライドアウトは、プロレタリア文学の概念をアメリカで最初に確立したのがデルであるとみるフリーマンの説に異を唱えているのである。先に掲げたフリーマンの叙述を見ても、「（デルは）一九一九年の夏には、はつきりプロレタリア文学ということをお口にしていた」といいながらも、その例としてあげているデルからの直接的引用は「真の社会主義的プロレタリア芸術」という言いまわしである。この表現が、ライドアウトの指摘するように、プロレタリア芸術というだけでは十分でないと感じていたことをしめしているとすれば、この時点のデルはプロレタリア文学を自立した概念とみなしていなかったといえよう。

ではアメリカで最初にプロレタリア文学の概念を確立したのはだれか。この問題に、ライドアウトはつぎのようにこたえている。

したがってゴールドが、その文学的立場の形成を部分的にはデルとの交流に負っているにしても、「プロレタリア文学」を「ラディカルな文学」と同義のものとして定義した最初の人間である。⁽⁶⁾

だがゴールドの功績を認める点にかけてはフリーマンもやぶさかではない。フリーマンはデルについて述べた先の引用にすぐ続けて、つぎのように書いている。

一九二一年初頭に、もうひとりのアメリカ作家がプロレタリア芸術のスローガンを掲げた。労働者階級と社会主義の信条とに深く傾倒するマイケル・ゴールドが、革命を叫ぶ芸術という観念を提起したのだ。⁽⁷⁾

フリーマンは、合衆国におけるプロレタリア文学概念の創始者としてデルとゴールドをほとんど同列においた。

ライドアウトがプロレタリア文学概念の発展段階を明確に区切ろうとするのに対して、フリーマンはこの概念の形成に寄与した人びとのあいだの連続性を強調した。フリーマンは、たとえばつぎのように述べる。

プロレタリア芸術に関するゴールドの論文は、社会主義運動と同じくらい古い伝統を引き継いでいた。一九〇一年のエドウィン・マーカムと同様に、また一九一六年のジョン・リードと同様に、ゴールドは芸術の未来を新しい社会をめざす労働者階級の闘争に結びつけた。この伝統は、ジャック・ロンドンやアブトン・シンクレアのようなアメリカ小説家たちを産み、ジョー・ヒルやラルフ・チャプリンやアルトゥーロ・ジョヴァニティのようなアメリカ詩人を産み出した。⁽⁸⁾

フリーマンがこの一節で言及している「ゴールドの論文」とは、題名は明示されていないけれども、一九二一年二月、『リベレーター』誌に発表された「プロレタリア芸術をめざして」である。この論文がアメリカのプロレタリア文学概念を確立するのに決定的な役割をはたし

たと見ることについては、ライドアウトはもちろん、フリーマンにも異存はなかったであろうし、もうこれは定説になったと考えてもさしつかえあるまい。

アメリカにおいてプロレタリア文学の概念を確立したのがデルであったにしろ、ゴールドであったにしろ、それがほんとうの独創ではなく、ロシアから輸入され、アメリカの文化に適合するように改鑄されたものであることはあきらかである。前に引用したフリーマンの文章のなかでも、デルが「プロレタリア文学ということをお口に」たのは、「ロシアにおけるプロレタリア芸術振興のために教育人民委員会が立てた計画の概要についてのソヴィエトの文書」に触発された結果であったと示唆されている。またゴールドについても、「イーデン・ポール、シーダー・ポール共著『プロレトクリト』(一九二二)の影響を受けたのかもしれない」と指摘され、事実、「プロレタリア芸術をめざして」の結論部分には、「労働者国家ロシアにおいてはプロレタリア文化が、その壮大な輪郭をかたちづくりながら、ぬっと姿をあらわしはじめた。(中略)プロレトクリトとは、これをめざすロシアの意識的努力である」などという、プロレトクリトへの

言及がふくまれている。

このような状況から推定できるように、プロレタリア文学の概念は、ロシア革命がもたらした衝撃と興奮をぬきにしては考えられない。デルがプロレタリア文学の概念を与えられたかもしれない「ソヴィエトの文書」も、ゴールドが影響を受けたかもしれないとされる『プロレトクリト』も、入手困難なのでその内容は確認できない。しかし二人とも、アメリカにおける新しい文化運動の方向をさぐりながら、革命直後のロシアで早速開始された文化革命に目をこらし、そこから学ぼうとしていたというところに、ほとんど疑問の余地はない。

二

アメリカにおけるこのような経緯を日本の場合と比較してみると、共通の問題が浮かびあがる。一般に日本のプロレタリア文学運動の出発点になったものとみなされる雑誌『種蒔く人』の創刊は、奇しくも右に述べたゴールドの「プロレタリア芸術をめざして」の発表と同じ一九二一年二月のことであった。だが創刊時の『種蒔く人』誌上には、プロレタリア文化とかプロレタリア文学

とかの言葉は使われていず、それが日本ではじめて用いられたのは、日本のプロレタリア文学についてのほとんど唯一の通史といえる山田清三郎『プロレタリア文学史』によれば、平林初之輔が一九二二年六月『種蒔く人』第九号に掲載した論文「文芸運動と労働運動」においてであったといふ。

だが、いまこの論文を読みかえしてみても、プロレタリア文学とかプロレタリア芸術とかという言葉そのものは見あたらない。「プロレタリア(の)文芸運動」という言葉はたびたび出てくるが、これはプロレタリア文学の概念そのものとは多少ズレがあるように思われる。この論文のなかの用語としては、それよりもむしろもうひとつの「階級芸術」という言葉のほうがプロレタリア文学の概念に近いのではないだろうか。いずれにしてもこの論文は、プロレタリア文学の概念を日本にはじめてもちこんだものであるとみなすには、あいまいさを残しているといわざるをえない。

これよりもっと明瞭にプロレタリア文学という言葉を用いている早い例として、青野季吉が一九二三年一月『新興文学』に発表した論文「文芸運動と労働階級」を

あげることができる。その冒頭は「ある会の席上で平沢計七氏は、プロレタリア芸術などと言って見たところで、今のところ労働階級では、そんなものを読む者は一人もない。(中略)という意味のことを述べた」と書きおこされていて、プロレタリア文学についての議論が人びとの話のなかですでに相当交わされていたことをうかがわせている。この論文と同じ一九二三年一月に刊行された、平林の第一評論集『無産階級の文化』巻頭の「無産階級の独立文化へ」にも、滅茶な伏せ字のあいだにまぎれもなく「プロレタリア文化」の文字が読める。この論文は、「年譜」によれば、もともと前年九月に発表されたものらしいが、「初出誌不明」となっており、実質的にはこの第一評論集所収のものではじめて世にひろく知られるようになったと見られる。つまり日本で文献上「プロレタリア文学(芸術、文化)」の語をはじめて用いたのは、平林と青野がほとんど同時であったと考えられる。ただし留意しておかなければならないのは、二人とも会話のなかではこれよりもかなり前からこの語を使っていたことである。

彼らがプロレタリア文学概念をおそらく同時に手に入

れたと思われる場合は、二人が一九二〇年に入社した国際通信社である。「平林初之輔年譜」にはつぎのような記述がある。

この年の秋頃内幸町の国際通信社に、試験を受けて入社していた市川正一が青野季吉を入社させ続いて平林も入社。イギリス人ジョン・ケネディが社長で、三人は外国電報翻訳者として勤務。ふだん五六通の電報を訳すだけなので恰好な勉強部屋となる。(中略)この勉強会が日本のプロレタリア文学理論の揺籃の場所となった。¹⁷⁾

この「勉強会」は、一九二二年の第一次日本共産党創立、一九二三年五月その首脳部の総検挙という動向のなかに解消してしまい、せいぜい二、三年続けられただけであったが、プロレタリア文学概念がここに種子となって落ちたことはほばまちがいない。もちろんそれは、アメリカの場合と同じくロシア革命の影響下、とりわけプロレトクリトへの関心という形ではじまった。先にあげた平林「無産階級の独立文化へ」にも「プロレトカル

ト」への言及があり、『種時く人』も一九二二年九月の第一二号は、発禁になったとはいえ、「赤色プロレトカルト・インタナショナルの研究」を特集していた。

ここで注意を引かれることは、平林にしても青野にしても、プロレトクリトに言及するときは「プロレトカルト」と英語読みによっていることである。飛鳥井雅道は、「小牧近江がパリで第三インタナショナルとパルビュスの「クラルテ運動」にふれていたこと、それも、他の社会主義者たちの資料源がアメリカ経由だったのに対して、直接フランスからボリス・スヴァリーヌの手をとおして、小牧のもとに入っていたことが、『種時く人』の性格を決定づけたのだ¹⁸⁾」と述べているが、プロレタリア文学概念が日本にはいつてきた過程では「アメリカ経由」も重要だったと思われる。

青野の「未完成自画像」には、このころの回想としてつぎのような文章がある。

平林初之輔や、わたくしなどが「種時く人」から「文芸戦線」へかけて仕事をした当時は、マルクス主義の文芸論の書ともいうものはまるで無く、しばらく経て

から、ロシアから帰った片上伸からブレハノフの理論について聞き囁った位のものだ。プロレタリア文学という名前にしても、平林やわたくしは、何か眼をつぶったような気持で、平語でいえば、断えずおっかなびっくりで使用し出したところへ、アメリカの「ニュー・マッセス」誌か、フランスの「クラルテ」誌で、その用語例に出会って、はじめて安心し、且つ自信をつけたような不安さであった。⁽¹⁹⁾

この回想は古い記憶に頼ったせいか、できごとが前後していかならずしも正確な叙述ではないが、プロレタリア文学という言葉が使われはじめたころの雰囲気だけはよく伝えてるように思われる。そしてそこでも「アメリカ経由」の情報を重宝していたと語られていることが注目される。

しかし、「アメリカ経由」にしろ、フランスから来たにしろ、プロレタリア文学がロシア生まれであったことははっきりしている。飛鳥井が日本のプロレタリア文学運動の出発点を『種時く人』創刊におく通説に反対し、ロシア革命以前、たとえば大杉栄、荒畑寒村らの『近代

思想』創刊(一九一二年)にまでさかのぼらせようとするのは、フリーマンがアメリカのプロレタリア文学を『コムラッド』やジャック・ロンドンにまでさかのぼって見ようとするのと同じことで、理解できる。プロレタリア文学概念が定着するためには、それに先行して地ならしをする先駆けが不可欠であったから、日本では大正デモクラシー、アメリカでは一九一〇年代のシカゴ・ルネサンスやニューヨーク・リトル・ルネサンスを、そのような役割を演じたものとみなすことができるし、さらにさかのぼって、ゴールドもホイットマンから説きおこしているように、進歩的伝統全体がプロレタリア文学概念の定着を準備していたということもできるからである。しかし、ロシア革命前の文学にも客観的に見てプロレタリア文学の特徴をそなえているものがあつたとしても、それをプロレタリア文学と呼ぶことは、厳密にはできない。プロレタリア文学には自覚的な運動との結びつきが欠かせず、したがってみずから名乗るための呼び名としてのプロレタリア文学という言葉が存在していなければならぬ。このプロレタリア文学という言葉が世界中にひろまったのは、ロシア革命の衝撃とプロレトクリトの

存在が知られてからである。

プロレトクリトとは、プロレタリア文化啓蒙団体同盟のロシア語略称である。この組織については、『レーニン 文化・文学・芸術論』の「注解」につきのような説明がある。

労働者たちの文化にたいする欲求にもとづいて発生し、まだ十月革命になる前に、臨時政府とは独立した団体として結成された（同盟のベトログラード協議会は、一九一七年十月十六―十九日に開催された）。（中略）プロレトクリトの諸団体がもともちも発展したのは一九一九年のころであった。だが翌年にはもうプロレトクリトのセクト主義的なマツハ主義的な傾向がとくにはつきりと現れ、党の批判をうけた。一九二〇年のはじめには、ネップの条件のもとでプロレトクリト派は、その活動を再建することができず、（中略）衰弱した。した彼らの機関紙誌『プロレタリア文化』（モスクワ）と、『未来』（ペテルブルグ）とは、一九二一年に発行を停止したが、プロレトクリト自体は一九三二年まで存続した。⁽²¹⁾

この説明からもうかがえるように、プロレトクリトはソヴィエト政府権力とかならずしも折合いがよくなく、早くからレーニンなど党最高指導部からの批判を受けていた。にもかかわらずこの団体が掲げたプロレタリア文化の理念は、それぞれの受け取りかたの差こそあれ、世界各国の革命文化運動によって採用された。このためにプロレトクリトは、日本で編集翻訳刊行されたユニークな書物『資料世界プロレタリア文学運動』全六巻が「I プロレトクリトとプロレタリア文学運動の成立」と題する章ではじまっているように、世界プロレタリア文学運動の元祖とみなされるようになった。

だがソヴィエト内部におけるプロレトクリトをめぐる論争は、マルクス主義文学理論の原則にもかかわらずながら発展し、プロレタリア文学概念本来の意味を考えようとする場合には、どうしても視野に入れておかなければならない経緯を織りなしていった。プロレトクリトは、元来「プロレタリアートの自身の階級芸術」⁽²²⁾の創造をめざすプロレタリアートの自主的団体であったが、ボグダーノフらの指導部は、彼らの構想するプロレタリア文化が

ソヴェエト・ロシアの文化のすべてであると主張しようとした。その場合にプロレタリア文化の実例として提示しうる内実は、若干の哲学や社会科学の成果を中核とするプロレタリア科学と、労働者が自分の生活や闘争を描いたプロレタリア芸術(主として詩)ぐらいいしがなく、新生ロシアの文化全体にとってかわるにはあきらかに不足であった。国民教育や学術研究などもふくめた文化の全分野にわたる再建をめざすためには、いわゆるブルジョア文化の継承こそ重要であるというのが、レーニンの強調したところであった。この観点からすれば、プロレタリア文化の偏重は、極左セクト主義の誤りと見られる。レーニンがプロレトクリトをどう見ていたかということについては、ルナチャルスキーの興味深い回想があるので紹介しよう。

まっさきに言っておくが、ヴラヂーミル・イリイチは、プロレタリアートのあいだから、作家や芸術家を生み出す労働者サークルの意義をけっして否定していたのではない。彼らの全ロシア的な団結を非常に目的にかなったものと考えていた。けれども彼が非常に恐れた

のは、プロレトクリトがプロレタリア科学づくり、一般的にはプロレタリア文化づくりにも全面的に従事する方向にずれていくことであった。これは一般的にはまったく時期に適しない、せおいきれないような任務であるように彼には思われた。第二に彼は、このような、当然未熟な思いつきによってプロレタリアートが、すでに出来あがっている科学や文化の学習や採取からひきはなされることになると考えていた。第三にヴラヂーミル・イリイチは、プロレトクリトのなかで、ある種の政治的異端が根をはりはしないかと恐れていた。たとえば、当時プロレトクリトのなかで、ア・ボグダーノフが演じていた大きい役割にたいして、彼はかなり敵意を感じていた。⁽²³⁾

レーニンは、このような見方に立ってプロレトクリトの行き過ぎや越権を抑えこもうとし、プロレトクリトをソヴェエト新政権内の教育・文化問題担当の人民委員の管轄下に組みこむ方針を出した。この人民委員の任にあったのがルナチャルスキーであるが、彼はレーニンと見解を異にしていたようである。そのためにレーニンは、

「私を上げしくのしることさえもあつた」⁽²⁴⁾とルナチャルスキーの回想にある。

とはいっても、ソヴィエトの文化建設が過去の文化に学ぶことからはじめなければならないということを重視する点においては、ルナチャルスキーもレーニンと意見が完全に一致していた。ルナチャルスキーがレーニンと見方を異にしていた点は、たとえばプロレトクリトのような団体に独自の分野を割り当て、その範囲内では自由に活動するのを認めるほうがよいと考えたことにあつた。

ルナチャルスキーは、「ふたたびプロレトクリトとソヴィエトの文化活動について」と題される発言記録で、「二つの極端」の危険を警告している。第一の極端は、「旧来の」学問、「旧来の」芸術の普及はすべて、ブルジョア趣味の黙認であり、文化普及の衣を着た呪うべき帝国主義的抑圧であり、社会主義の若々しい肉体をくたびれ果てた老いぼれの血で汚すことである」と考える人びとのことで、これはプロレトクリトを暗にさしている。もうひとつの極端は、第一のものの裏返しみたいなもので、既成の文化をそっくり継承するだけでさしあたり十分であると考える立場であり、これは暗にヴォロンスキ

ー、トロツキーらの論調をさしている。これらいわば左右の極端を批判した上で、ルナチャルスキーはプロレトクリトの正しい方についてつぎのように示唆している。

プロレトクリトは、いかなる場合にもプロレタリア芸術とプロレタリア思想の萌芽をもって既成の価値と考えたり、先行する諸時代の文化の諸価値をそれによって置きかえようと企てたりしてはならないのである。

また自己の諸機関を通じて「人間的教養」のすべての領域の知識を普及することに奔走するのもプロレトクリトの仕事ではない。第一の場合には、この上なく軽率な不遜さを発揮することになるし、第二の場合には、プロレタリアートが、別の方面で行なう活動、すなわち全国的活動に割り込むことになる。／＼しかし、プロレトクリトは研究^{スタージュ}所的な活動、つまりプロレタリア内部の独創的な才能の発掘と支援、労働者階級出身の作家、芸術家、あらゆる種類の少壮学者たちのサークルの設立、物質的、精神的文化すべての領域における様々な研究所や活気あふれる組織の創設といった活動

には、全神経を集中しなければならぬ。⁽²⁶⁾

このようなルナチャールスキーの立場は一貫しており、一九二五年六月ロシア共産党中央委員会で「文学の領域における党の政策について」が採択されるまで続いた論争でも、教育人民委員として指導的な役割をはたした。しかも藤井一行によれば、「この中央委員会決議の作成にはルナチャールスキー自身が重要な役割を果たしている。かれは党の政治局が選任した決議作成委員会の責任者をつとめたのである」⁽²⁷⁾。事実この決議には、「党は所与の領域でのさまざまな集団や潮流の自由競走を主張しなければならぬ。ほかのいっさいの問題解決は役所的・官僚的な偽の解決となるであろう」⁽²⁸⁾などあり、ルナチャールスキーと同じ構えが明瞭に見られる。ということとは、他の「集団や潮流」の上に立つ特権的地位を与えよと主張していたプロレトクリトの要求を彼が拒否したことを意味し、ひいては、プロレタリア文化という概念に対しても批判的な見方を残していたということにある。

デルが文化闘争に対する展望を「教育人民委員部が立てた計画の概要についてのソヴェートの文書」から得た

という、先にあげたフリーマンの叙述が事実であるとすれば、デルが教育人民委員ルナチャールスキーの考えに間接的に共鳴し、プロレタリア文学概念にある程度距離をおいたのもうなづけるのではないだろうか。

しかし、プロレタリア文学概念をもっとはっきり否定したのはトロツキーである。彼の著書『文学と革命』は、プロレタリア文学などというものが理論的に存在不可能であると論じ、つぎのように述べている。

「プロレタリア文学」「プロレタリア文化」といった言葉は危険である。この言葉は未来の文化を今日の狭い枠に押し込む虚構であり、それは展望をいつわり、均衡を乱し、規模を曲げ、そして危険きわまりない小集団の倨傲を培養するからである」⁽²⁹⁾。

このように見てくると、新ソヴェート・ロシアでプロレトクリトによって掲げられたプロレタリア文化というスローガンは、レーニンやトロツキーによってほとんど原則的なレヴェルで否定され、ルナチャールスキーにも批判されていたことがわかる。にもかかわらずプロレタリ

ア文学の概念は、革命の有力な指導者たちの手綱のとどかぬところまで急速に普及し、アメリカなど各国文化運動の目標として人びとの心をとらえたのであった。

三

プロレタリア文学という語は、はじめからきわめて問題にみちた概念であり、その意味や評価をめぐって決着のつかない論争をいつもまっつわらせてきた。この語の出生地といえるロシアにおいて、党指導部は、新生ソヴィエトの文化全体を荒廃からたちなおらせ、発展させる責任を負うために、既存文化の継承を重視せざるをえず、当然のことに、急進派から見れば保守的とすらうつる姿勢でプロレタリア文化というスローガンに警戒の視線をむけた。そして一九二〇年ごろには、レーニン、トロツキーらの批判を受けて、プロレタリア文化という概念はほとんど消滅しかけた。にもかかわらず、この概念が大戦間の革命文化運動をおおざっぱに総称するにいたったのは、どういうわけであろうか。

この成り行きを決定した事情のひとつとしては、プロレタリア文化という概念に対するもっとも強力な反対者

がトロツキーであったということがある。とくに一九二四年レーニンの死後、激化していったソヴィエト内の抗争における一方の当事者トロツキーが結局敗北したということと、プロレタリア文化の概念が存続したことは無関係でないと思われる。

しかしそれだけでこの概念の流行を説明することはできない。もっと奥深い要因として、この概念が既存文化への訣別や断絶の契機をもっとも鮮明にするので、社会変革や文化革命を熱望する急進的な人びとに歓迎されたということが指摘されなければならない。したがってプロレタリア文化の概念は、ソヴィエト内の若くて過激な芸術家、知識人のあいだに支持者を見出す傾向があっただけでなく、むしろ革命運動を政治闘争として展開するには革命勢力の主体的力量に不足していた、日本やアメリカのような国ぐにで、政治の代償として精力を注ぎこまれた文化運動において熱心に受け入れられた。これらの国の革命勢力には、さしあたり既存文化の継承よりも、それとの訣別こそが課題であると意識されたにちがいないからである。

アメリカでは一九二一年ゴールドの「プロレタリア芸

術をめざして」以来、プロレタリア文化概念そのものの検討が深められはしなかったものの、プロレタリア文学は、一九二〇年代を通じて確実に前進していった。それは一九一九年から二〇年にかけてのバーマーの赤狩りによって出発し、一九二七年サッコとヴァンゼッティの処刑にいたる反動期のさなかのことである。それでも『リベレーター』、およびその後継誌『ニュー・マッセズ』や、『モダン・クォーターリー』には、無名のプロレタリア出身の詩人や作家がつきつぎに登場したし、マルクス主義批評の試みも重ねられてきた。ジョー・ヒル以来の伝統を誇るIWW系のプロレタリア詩運動も、ラルフ・チェイニー、ジャック・コンロイらの反逆詩人団などという形で続けられている。この間プロレタリア文学の概念は、ゴールドの「プロレタリア芸術をめざして」の段階以上に明確な規定を獲得したとも見えないが、実作の経験や成果が積み重ねられていくうちにその内実を徐々に形成していき、『ニュー・リバブリック』誌一九二八年二月一日号に掲載された論文「文学の政治」で、まだマルクス主義研究家にはなっていないなかったエドマンド・ウィルソンが、「社会革命を支持する」一群の劇作家た

ちのことを「プロレタリア文学の信奉者」と呼ぶことができるまでになつていた⁽³⁰⁾。

プロレタリア文学概念を規定しようとする試みに再びとりくんだのは、またもやゴールドであった。ゴールドは『ニュー・マッセズ』の一九三〇年九月号で、「私は、世界中でプロレタリアートが成長したのにもなつて出現したプロレタリア文学の先触れを告げた、アメリカ最初の著作家が自分であつたと確信する⁽³¹⁾」と豪語した後、プロレタリア文学のしたがいべき「いくつかの法則」を解明しようとして試みている。このような試みがあらわれたことは、プロレタリア文学とは何か、また何であるべきかという議論が、すでにかなり出ていたことをしめしている。

ゴールドのいわゆる「法則」をここに紹介する必要もあるまいが、この著作のなかの、たとえばつきのような一節は注目される。

プロレタリア文学というこの新たな領野には、多くの形式が生息している。そのうちの何かひとつの文学形式をとらえて、これをプロレタリア文学全体にあては

めるべき模範へまつりあげるなどというのは、教条主義的な誤りである。／ロシアの未来派はこの種の愚行をおかした。しばらくは舞台をひとりじめしたものの、いまや急速に排除されつつある。／私の実感では、いまや成長しつつある新しい形式とは、「プロレタリア・リアリズム」とでも名づけうるものである。⁽³³⁾

ここには、一九二五年ロシア共産党中央委員会決定にあるさまざまな潮流間の自由競争という原則を確認すると同時に、リアリズムの潮流への傾倒を深めるといふ、矛盾した姿勢があきらかである。しかも未来派への言及は、プロレタリア文学のなかでも芸術上の前衛や実験を強調するモダニストが退潮しつつあったことを反映している。だがゴールド自身がこのなかで自分のかつての著作「プロレタリア芸術をめざして」をふりかえって、「私のアプローチはかなり神秘主義的で直観的なものであった」と述べていることからわかるように、プロレタリア芸術がリアリズムを軸にするということは、はじめから確定していたわけではなかった。

もちろん、マルクス主義芸術論を構築しようと展望す

る場合には、リアリズムがマルクス主義の創始者たちの信奉した芸術方法として重視されるはずである。マルクスやエンゲルスがリアリズムを好み、プロバガンダ芸術やあからさまな傾向文学に危惧を抱いていたことは、よく知られている。その上リアリズムは、趣味嗜好の問題にとどまらず、マルクス主義の哲学的基礎である唯物論によっても支持されるように思われた。しかし興味深いことには、ロシア革命直後プロレタリア芸術の主張があらわれはじめたころは、社会のリアリステイックな描写という客観的な契機よりも、創作者や読者の階級性とか、手法の反因襲性とか、作品のプロバガンダとしての有効性とかの、主体的な契機が強調される傾向が比較的強かった。

プロレタリア文化運動が主体的契機を強調していたことは、先にあげた平林の論文ではつぎのような表現をとおってあらわれていた。

最近に起ったプロレットカルト・インタナショナルの運動こそは此の時期に於ける無産階級の戦闘的革命的文化運動である。ブルジョア文化に対するプロレタリ

ア文化の対抗運動である。(中略)此の運動は必然的にロマンチック・ムーヴメントの性質を帯びる。何となればそれは既成文化の完成運動ではない。(中略)それは全く新しいものを樹立する運動だからである。⁽³⁵⁾

「ロマンチック・ムーヴメント」の要素を十分にふくんでいたプロレタリア文化がリアリズムの方向で一本化されていったのは、一九二〇年代末期と推測できるが、ゴールドの「プロレタリア・リアリズム」は、後に述べる蔵原惟人の「プロレタリア・レアリズムへの道」などとともに、この動向を反映するものであった。

ゴールドのこの論文が発表された一九三〇年という年は、アメリカでプロレタリア文学運動が一大飛躍をとげ、新しい段階へ突入した時点でもあった。前年十月ウォール街の株式大恐慌によりはじまった大不況のために、それを予言していたように思われたマルクス主義への関心が急にたかまった。そのような知的雰囲気なかで、大恐慌と同時に結成された新しい文学運動組織ジョン・リード・クラブが全米各都市へ拡大していった。この組織はおもに無名のプロレタリアートで文学を志す若い人び

とを引きつけたので、アメリカのプロレタリア文学運動にかつてなかったような内実と活気を一気にもたらした。しかし皮肉なことに同じころ、ロシアのプロレタリア文学運動はすでに退潮期に入っていた。一九三〇年十一月に国際革命作家ビューローがソ連ハリコフで開催した第二回革命作家世界大会、ふつうハリコフ大会と称されるものは、世界プロレタリア文学運動の絶頂となると同時にこの運動の終焉を告げるものでもあった。そのひとつのしるしは、この大会の正式名称にも、その主催組織にも、プロレタリア文学の語がふくまれていないことに見出せる。ここには、やがてソ連で一九三二年にプロレトクリトが解散し、一九三四年にはソヴェト作家同盟結成とともにロシア・プロレタリア作家協会(ラップ)が解散し、社会主義リアリズムの採用とともにプロレタリア文学の概念がほぼ完全に廃棄されていく動向が、すでにきざしていたと見られる。

だが日本やアメリカでは、プロレタリア文学のスローガンがもつと後の時期まで掲げられていた。たとえば一九二八年『戦旗』創刊号に「プロレタリア・レアリズムへの道」を発表して、「ナップの門出をかざるにふさわ

しい日本プロレタリア文学理論のあらたな展開⁽³⁶⁾をさし
しめたと評される蔵原惟人も、一九三一年の「芸術的
方法についての感想」で「プロレタリア・レアリズムと
いう名称は(中略)ソビエト同盟でもドイツでも現在で
はすでに用いられていない」と述べながら、「しかし、
それは決してプロレタリア・レアリズムという名称で呼
ばれた方向が誤っていたから⁽³⁷⁾」ではないとして、プロレ
タリア文学の概念に、ソ連では見られなかったような執
着をしめた。

同様のことがアメリカでも見られる。たとえば一九三
五年の第一回アメリカ作家会議でエドウィン・シーヴァ
ーが「プロレタリア小説」の定義について報告したなか
に、つぎのような一節がある。

いまやソヴィエトの小説家がソ連のプロレタリア文学
について大いに語るなどということは、期待するべき
でないし、実際語ってもいない。今日彼らのテーマは、
ソヴィエト文学、社会主義の祖国の文学、社会主義リ
アリズムの諸問題等々である。(中略)だが合衆国
のプロレタリア文学は(中略)未来に根ざし、その未

来の主導権を執るべく組織活動を続けている階級に根
ざしている⁽³⁸⁾。

ソ連でプロレタリア文学が消滅しても、資本主義国の革
命文学運動はプロレタリア文学概念を簡単に捨てるわけ
にはいかないという考え方が、ここにもしめされている。

このためにアメリカや日本では、一九三〇年代なかば
すぎまでプロレタリア文学概念がいわば生き続け、大戦
間革命文学全体の総称としての地位を獲得することにな
った。これらの国ではこの概念の廃棄が運動自身によっ
て明確に確認されなかったからである。それどころかア
メリカでは、あいつぐ弾圧の結果一九三四年ナルプの解
体によって運動がむりやり押し潰された日本よりもさら
におそく、『合衆国プロレタリア文学作品集』の刊行と、
第一回アメリカ作家会議の成功を見た一九三五年に、プ
ロレタリア文学運動の絶頂を迎えた。

しかし、アメリカでも絶頂は、やはり同時にその後の
急激な退潮の前触れとなった。『合衆国プロレタリア文
学作品集』でも、アメリカ作家会議でも、プロレタリア
文学概念をめぐる討論がまとめられているのは、まさに

特徴的である。

この絶頂期に止められた、アメリカのプロレタリア文学概念をめぐる議論の到達点について論じてゐるには、稿を改めるほかはない。

- (1) プロレタリア文学はプロレタリア芸術にふくまれ、プロレタリア芸術はプロレタリア文化にふくまれる。本稿ではこれら三つの言葉をいさゝち並記しながら、なるべくプロレタリア文学の一語で間に合わせ。
- (2) Joseph Freeman, "Introduction", *Proletarian Literature in the United States: An Anthology*, ed. Granville Hicks, et al. (International Publishers, 1935), p. 24.
- (3) 青野季吉「自然生長と目的意識」、『革命と文学』(現代教養文庫「青野季吉選集1」)「社会思想研究会出版部」昭和二十八年)「三七—三八頁」。
- (4) Freeman, op. cit., pp. 24—5.
- (5) Walter B. Rideout, *The Radical Novel in the United States, 1900—1954: Some Interpretations of Literature and Society* (Harvard University Press, 1965), pp. 123—4, footnote.
- (6) Loc. cit.
- (7) Freeman, op. cit., p. 25.
- (8) Loc. cit.
- (9) Daniel Aaron, *Writers on the Left* (Avon Books,

1969), p. 112.

- (10) Michael Gold, "Towards Proletarian Art", *Mike Gold: A Literary Anthology*, ed. Michael Folsom (International Publishers, 1972), p. 69.
- (11) 山田清三郎『プロレタリア文学史(上)』(理論社、一九六八)「二七六頁。なお、『種蒔く人』第二巻第五号(一九二二年二月)には吉田金重「プロレタリアの文学」が掲載されているが、このなかに「プロレタリア文学」の語も概念もな。
- (12) 平林初之輔「文芸運動と労働運動」、『平林初之輔文芸評論全集』上巻(文泉堂書店、昭和五十年)「一三一頁等。以下この本は『全集』と略記する。
- (13) 同右書、同右頁等。
- (14) 青野「文芸運動と労働階級」、『資料世界プロレタリア文学運動』第一巻(三一書房、一九七二)「五三一頁。以下このシリーズについては「資料」と略記する。
- (15) 平林「無産階級の独立文化へ」、『全集』上巻、一二頁。
- (16) 渡辺正彦「平林初之輔年譜」、『全集』下巻、八九二頁。
- (17) 同右書、八八八頁。
- (18) 飛鳥井雅道『日本プロレタリア文学史論』(八木書店、昭和五十七年)「三五頁」。
- (19) 青野「未完成自画像」、『文学と人生』(現代教養文庫「青野季吉選集3」)「社会思想研究会出版部」昭和二十八年)「一七九—一八〇頁」。

- (20) 飛鳥井、前掲書、二七一三四頁。
- (21) 蔵原惟人・高橋勝之編訳『レーニン 文化・文学・芸術論(下)』(大月書店、一九六九)、「注解」九八一九九頁。
- (22) アレクサンドル・ボグダーノフ、小泉猛訳「プロレタリアートと芸術(決議)」、『資料』第一巻、二六頁。
- (23) 蔵原・高橋編訳、前掲書(下)、一二〇四頁。
- (24) 同右書、同右頁。
- (25) アナトーリ・ルナチャールスキー、渡辺雅司訳「ふたたびプロレトクリットとソヴェットの文化活動について」、『資料』第一巻、三六頁。
- (26) 同右書、三七頁。
- (27) 藤井一行「解説」、ルナチャールスキー著、藤井編訳『芸術表現の自由と革命』(大月書店、一九七五)、二二八頁。
- (28) 「付録、文学の領域における党の政策について」、同右書、二〇六頁。
- (29) トロツキー、内村剛介訳『文学と革命I』(現代思潮社、一九七五)、一八九頁。
- (30) Rideout, op. cit., p. 124, footnote.
- (31) Gold, "Proletarian Realism", op. cit., p. 203.
- (32) Ibid., p. 205.
- (33) Ibid., p. 206.
- (34) Ibid., p. 204.
- (35) 平林「無産階級の独立文化へ」、『全集』上巻、一二頁。
- (36) 山田『プロレタリア文学史(下)』(理論社、一九六八)、一八〇頁。
- (37) 蔵原「芸術的方法についての感想(前編)」、『蔵原惟人評論集』第二巻(新日本出版社、一九六七)、一八四頁。
- (38) Edwin Seaver, "The Proletarian Novel", *American Writers' Congress*, ed. Henry Hart (International Publishers, 1935), p. 103.
- (一橋大学助教授)